

梶田叡一著「教師力再興－優れた教師に満ち満ちた学校に」教育改革選書No. 2、明治図書出版、2010年6月刊を読む(6)

開示悟入の教育のために(6)

入らしめる

1. (1) もう一つ、「入らしめる」ということを考えておかねばなりません。
(2) これは、学校で学習したことが本当に身につけて、生活に生かされていくようになる、ということです。
(3) つまり、その人自身の一部となる、あるいはその人を変えてしまう、ということです。あることを学ぶことによって、物の見方が変わる、感じ方が変わる、態度や行動も変わってしまう、ということと言ってもいいでしょう。
2. (1) これはもちろん、そうしばしば起こることではないかもしれませんが。
(2) しかし力のある教師は、そこまでの影響を子どもたちに与えてしまいます。
(3) 教師の物の見方、感じ方を知らず知らず子どもたちも身につけてしまっているだけでなく、喋り方や歩き方まで教師そっくりになることがあります。
(4) また、「あの先生のあの一言で自分のそれからがすっかり変わってしまった」といった話もよく耳にするところです。
(5) それだけでなく、あの教科書のあの部分の学習で、あの問題をめぐってあの時の話し合いで、見学に行ったあの所のあの印象で、自分のそれまでの考え方が大きく変わってしまった、という述懐に接することも少なくありません。
3. (1) 学習成果のこうした主体化、生活化を、教える側でいつも頭に置く必要があるのではないのでしょうか。
(2) 一つには、教師が無意識のうちの大変な影響を、あるいは極めてつまらぬ影響を、一人ひとりの子どもの人格形成の上に与えてしまっているのでは…という反省をしてみる必要があるでしょう。
(3) そしてもう一つ、非常に大事なことについては、子どもの主体の一部、生活の一部となるところまで、意識的意図的に指導を深めていく、ということを考えなくてはならないでしょう。
4. (1) 自分が大事なことと思うことを子ども自身も主体化生活化してくれるためには、つまり教師がそこまで深い影響を子どもに与えようと願うのなら、何よりも先ず、教師自身常に自分の本音で子どもに接する、ということが不可欠です。
(2) さらに、教師のそうした本音の言動に熱と迫力が伴っていかなくてはなりません。
(3) この意味で教師は、自分自身の心を衒いやこだわりのない「素直」なもの、実感と本音がストレートに出てくる「透明」なものにすべく修業していかなくてはならないでしょう。

5. (1)もちろん、「入」をねらった具体的な教育活動も、工夫していかななくてはなりません。
- (2)中学生や高校生に「卒業論文」を書かせる試みや、自分の選んだテーマについて小グループで週一度、一年間あるいは一学期間続けて学習し合う「ゼミ学習」の試みなども、こうした「入」の面に関わるものと言えるのではないのでしょうか。
- (3)また、校外に連れて行って養老院や障害児の施設など様々な場で交流活動を行うとか、実際の事業所や店などで体験させてもらうといった活動なども、この「入」の色合いの濃いものと言えるのではないかと思います。
6. (1)こうした「開」と「示」と「悟」と「入」のいずれにも配慮した教育を、何とか実現したいものです。もちろん、一つの単元にこれら四つの面のすべてがそろわなくても結構です。
- (2)ましてや、一単位時間の授業の中にこれら四つの面が含まれねばならない、ということはありません。
- (3)もっと長い目で「開」「示」「悟」「入」のバランスのとれた教育を実現していきたいと思っています。

P142 ~ 144

[コメント]

「入」とは「開」・「示」・「悟」、つまり「理解」した内容を「定着」させ「応用」すること。「定着」「応用」の基礎となる「入」の梶田先生の御説明から学びたい。

— 2012年10月31日 林 明夫記 —